受動文の例外における規則性について

岩　本　弘　道*

On the Regularity in the Exceptions to Passivization

Hiromichi IWAMOTO

1. 序

受動文の研究は，生成文法の初期から現在にいたるまで，その研究の中心の一つをなしてきた。そして現在一般に，Chomsky を中心とする理論においては，受動文は対応する能動文から統語変形によって派生されるものと理解されている。統語変形は，自律的統語論（autonomous syntax）を前提とする枠組みにおいては，純粋に構造依存的に適用されるものであり，他の方法の部門である音韻的情報や意味的情報にはいっさい依存しないとされている。しかしながら，受動文にかんしてはこうした盲目的な規則適用の例外が存在し，それらの例外をどのように文法の内部で処理するかが一つの大きな問題とされてきた。本小論は，こうした受動化変形の例外についてどの様なものがあるか，そしてそれらを処理するために提案されたいくつかの分析について考察するものである。

最近の生成文法における受動文の研究は，原理とパラメータ（principles and parameters）の枠組みで諸言語の受動態がどのように生成されるかという問題，それらの生成を可能にするにはどのようなパラメータを設定すればよいかを議論するものが中心となっている。たとえば一般に英語では自動詞の受動態は許されないが，ドイツ語，オランダ語などでは可能である。また英語では前置詞受動文（＝疑似受動文）が可能であるが，フランス語をはじめとするロマンス諸語ではそうした受動文は許されない。これらの諸言語間に見られる多様性を，一方で可能な文法をできるだけ制限しながら，普遍文法の枠組みの中でどのように処理していくかが，現在の生成文法理論の大きな目標の一つである。

こうした研究の背後には，生成文法の目標が人類一般の持つ言語能力を規定するような普遍文法の諸原則を突きとめようとするものであり，したがって諸言語に共通する普遍的特徴を抽出し理論を組み立てるという方法論的背景がある。その結果必然的に文法の中核をなす現象（＝中核文法 Core Grammar）が研究の中心となる。そう言った意味においては，Chomsky の *Lectures on Government and Binding*（1981）にはじまる 80 年代の生成文法は大きな成果を挙げてきたと言える。とりわけ受動文の分析にかんしては，Borer (1984), Kayne (1984), Jaeggli (1986), Burzio (1986), Baker (1988), Baker, Johnson, and Roberts (1989), Koster (1987) などがこの方向性にしたがった代表的な研究である。日本でも最近，長谷川（1989），中村（1991）などが日英語の比較を中心に，諸言語の受動文を原理とパラメータの枠組みで研究している。

しかしながら，言語には普遍文法だけでは説明しきれない，いわば周辺的な現象も存在する。英語の受動文についてもその基本的な部分の説明はかなり深いところまで行なわれているが，そうした統語分析の例外とも言える現象がある。例えば，構文に特定の条件や語彙的特殊性を極力排除する方向にある標準的な統率・束縛理論では過剰生成してしまうような受動文の問題がある。こうした受動化の例外となるの文は，従来から幾つも知られており，それを文法の中でうまく処理するには，純粋な統語的分析だけでは不可能で，意味的要因や語用論あるいは談話的要因をも考慮しなければならないということが指摘されてきた[1]。

この小論では，そうした受動化の例外となる文にどのような特徴があるかを考察し，それらをどのように処理すべきかの方法を探ることを試みる。その性質上，理論的な問題よりも，記述的な問題に重点がおかれる

平成 3 年 10 月 2 日受理
* 一般科

こととなる。

2.　受動文の統語分析

2.1.　初期の分析

Chomsky（1965）の標準理論での分析では，受動文は，対応する能動文にほぼ近い形の深層構造から，単一の受動化変形規則（passive transformation）によって派生されてきた。しかしながらその後の研究により，受動文に見られる動作主を表す by-句は変形によって導入するよりも基底生成した方がよい，名詞句内における受動化では主語の by-句への移動と目的語の主語の位置（名詞句においては所有格の現れる位置）への移動はどちらも随意的であり，単一の受動化変形規則を仮定する根拠が無いことなどが示されてきた。その結果 70 年代に入ると，受動文は「動作主後置規則」と，他の主語への繰り上げ構文などにも見られるような「名詞句前置規則」とに分けられた。ここではとくに Chomsky（1973, 1977）での定式化をもとに，受動文の基本的統語構造を検討する。

この枠組みでは，能動文に等しい構造が基底構造とされ，「動作主後置規則」適用後につぎのような「名詞句前置規則」が適用されて受動文が派生される（cf. Chomsky 1973）。

（1）　構造記述（SD）: X—NP1—VY—NP2—Z
　　構造変化（SC）: X—$NP2_i$—VY—t_i—Z

（2）　a. They chose the girl with blonde hair, not the one with red hair.
　　b. The girl with blonde hair was chosen, not the one with red hair.
　　c.* The girl with blonde hair, not the one with red hair was chosen.

ここで（1）の X, Y, Z は「変項」（variable）であり，任意の要素連鎖を表すものである。したがって，（2a）のような単純な他動詞を含む受動文では，X, Y＝ϕ であり，Z＝not the one with red hair である。また NP1＝they, NP2＝the girl with blonde hair である。そこで，（1）の変形規則によって（2b）のような受動文が派生される。だが NP2＝the girl with blonde hair, not the one with red hair という解釈は基底の句構造規則から出てこないので（2c）のような文は派生されない。またたとえば，Y＝P（前置詞）の場合には次のような受動文が規則（1）によって派生される。

（3）　a. You can rely on the priest.
　　b. The priest can be relied on (by you).

（3b）はいわゆる「複合動詞」（complex verb）を含む受動文である。しかしながらこのままではまた次のような非文法的な受動文までも，同じようにこの変形規則によって派生されてしまうことになる。

（4）　a. The cat is lying on the mat.
　　b. *The mat is being lain on by the cat.

そこで Chomsky はこの VY が「意味的単位」をなす必要があるという条件を（1）に課している。そうすれば（3）の場合には rely on＝trust というような「意味的単位」をなしているが，（4）lie の場合には別に lie on がまとまってひとつの「意味的単位」をなすとみなす根拠がないからという理由で（3）と（4）の文法性の差が説明できることになる[2]。このことは，たとえば，rely は on 以外の前置詞とは結びつかないが，lie の方は lie under the tree, lie beside him などのようにいろいろな前置詞と結びつくし，さらには He lied down のように前置詞句なしでも用いられることから，（4）の on the mat は場所を表す前置詞句にすぎず lie とは直接結びついていないことからも支持される。

このように Chomsky の提示した条件はこの種の文の差異をうまく説明できるのであるが，意味というものはなかなか簡単には規定し難いものであるので，後述するようにこの VY の連鎖に対応する「意味的単位」なるものが厳密にはどういうものであるかが問題となる。

2.2.　現在の分析

現在の「統率・束縛理論」（Government and Binding Theory）においては，能動文となるものとは別個の受動文独自の基底構造から，名詞句移動（NP-movement）というより一般的な移動変形規則（Alpha movement）によって受動文が派生される。基底構造にすでに受動分詞の形態素である-en が存在する。能動・受動の規則的関係は，語彙部門で処理されるか，あるいは「再分析」（reanalysis）によって処理されることになる。またこうした受動文にかんする統語構造およびそれを派生するのに必要となる統語的仕組みは普遍的なものであると仮定される（cf. Haegeman 1990 : 271f.）。

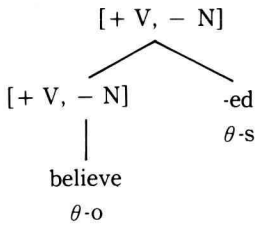
（5）　D-構造：$[_{IP}\ [_{NP}\ e]\ [_{I'}\ I\ [_{VP}\ V_{pass}\ NP\ ...]]]$

S-構造：$[_{IP}\ NP_i\ [_{I'}\ I\ [_{VP}\ V_{pass}\ t_i \ldots]]]$

（6） a. $[_{IP}\ [_{NP}\ e]\ [_{I'}$ is $[_{VP}$ believed $[_{NP}$ this story] by the villagers]]]

b. $[_{IP}\ [_{NP}$ this story$]_i\ [_{I'}$ is $[_{VP}$ believed t_i by the villagers]]]

（7） 受動分詞（passive participle）



（Jaeggli 1986：592）

(5) の D-構造で，まず基底生成される $V(ERB)_{pass}$ は語意部門で形態規則によって派生されるものである。そのさいこの動詞は，受動形態素-en に本来なら文の主語に与えるべき外項の主題役割（external theta-role），ここでは θ-s，を付与し，受動態分詞としては主語の位置へ主題役割を与える能力を失い，それにしたがって目的格付与の能力も失う。（この格付与能力についての規定は英語独自のものである。フランス語やイタリア語では受動分詞にも格付与能力は残っているので，受動文でも目的語が動詞の直後に続く事が可能である。）したがって，英語の受動文では能動文の場合とは異なり目的語名詞句がそのまま基底の位置にあると統率の条件のもとでの格付与がなされない。したがってそのままでは，S-構造において有形の名詞句はすべて格を持たねばならないという「格フィルタ」(Case Filter)に違反し，基底生成される目的語の位置から IP の主語の位置へ格を付与されるべく移動する。IP の指定部(specifier)にあたる主語の位置は，屈折辞 I (nflection) によって統率（govern）される位置であり，S-構造で I から主格を付与され「格フィルタ」に違反することなく（6b）の受動文は正しく派生されることになる。

さらにこの「格フィルタ」による説明には，次のような節を目的語とする構文の受動態をもうまく説明できるという利点がある。

（8） a. Mary believes that John will pass the test.

b. It is believed by Mary that John will pass the test.

c. That John will pass the test is believed by Mary.

目的語が名詞句の場合とは異なり，(8a)のように目的語が節の場合には，この目的語節が NP であると仮定すると，受動化のさいの目的語の移動は義務的ではないという問題が生じる。この差は，(1) の変形規則だけでは説明できない。さらに次の例が示すように，動詞の目的語節と言われるものが NP とは異なることを示す事実がある（cf. Emonds 1976）。

（9） a. He insisted on his innocence.

b.*He insisted his innocence.

（10） a. He insisted that he was innocent.

b.*He insisted on that he was innocent.

（11） a. It was insisted that he was innocent.

b.*It was insisted on that he was innocent.

（12） a.*That he was innocent was insisted by him.

b. That he was innocent was insisted on by him.

これらの例は，insist (on) に後続する目的語節が NP でないことを示唆している。もし NP ならば前置詞の on が消去される必要はない。英語では that-節は前置詞に直接は後続しないという規則性があるが，この事実を一般的にとらえるためにも，目的語節が NP であるとしない方が好ましい。したがって，目的語節は，CP であるということになる〈3〉〈4〉。しかしそうなると，標準理論の受動変形ではこの受動文が派生できない。

それに対して，現在の枠組みでは，CP は NP と違って S-構造で格を必要としないとすれば，受動文での移動の自由なことが無理なく説明される。さらに，次のような例外的格付与構文についても，この「格フィルタ」に基づく分析はうまく処理をすることができる。

（13） a. Mary believed [John to be sincere].

b. John$_i$ was believed by Mary [t_i to be sincere].

c.*[John to be sincere] was believed by Mary.

この構文の統語構造は，(14)のように動詞がその補部として that-節の場合のような CP 補文ではなく IP 補文をとる。IP は格付与の必要条件となる統率に対しての障壁とはならないので，この補文の主語は，能動文において直前のそれを統率する位置にある主節の動詞から目的格を付与され，そのまま能動文ならば「格フィルタ」に違反しない。

（14） $[_{IP}$ Mary $[_{VP}$ believed $[_{IP}$ John $[_{I'}$ to $[_{VP}$ be

sincere]]]]]

さてCP同様にIPも，名詞句（NP）とは異なり格を必要としないので移動は自由である。一方，この補文の主語の名詞句Johnは，受動文においては，移動せずに動詞の補部の位置に残った場合には，格を付与されず，そこに留まっていられないので，主語の位置へと移動し，そこで主節の時制（tense）と一致要素（agreement：AGR）を含む屈折辞（Inflection：I）から主格を与えられ「格フィルタ」に違反することなく，正しく（13b）が派生される。一方，（13c）が非文法的なのは，かりに補文のIPが空である主節の主語の位置へ移動したとしても，この場合には，補文の主語名詞句が必要な格を与えられないためである。主語の位置に不定詞句が生じるためには，不定詞句の主語に格を付与する能力を持つ補文化辞（complementizer）のforを持つCPとならなければならない（屈折辞Iは主語の位置にある要素全体，ここではIP，には主格を付与できるが，動詞とは異なりその内部にある要素にまで格を付与する能力は無いものとされている）。

このように，現在の理論と初期の理論では受動文の扱い方がやや異なってはいるが，ここで対象とされる現象にかんしてはどちらも基本的には同じものであると言えるので，以下では説明の都合上，標準理論での分析をもとに考察を進めることにする。

3.　受動文の統語パタン

さて，受動文を許すのは一般的に言って目的語名詞句を補部にとる他動詞であるが，これは受動文の派生が名詞句移動によるという必然的な帰結であると言えよう。したがって英語では目的語をとらない自動詞には対応する受動文は存在しない[5]。

(15) a. Mary danced very well at the party last night.
　　b.*Mary was danced very well at the party last night.
　　c.*The party was danced by Mary very well at last night.

しかしながら，英語でも前述の（3）でのように動詞が自動詞であって，後続する前置詞と結びついていわゆる「複合動詞」を形成し，それが目的語をとるような場合には受動文の派生が許される。これは（1）のVYの部分の変項Yが前置詞（P）と解釈される場合であった。ではこれ以外にVYはどのような連鎖を許すのだろうか。そのパタンをまとめると以下のようになる。

3.1.

まずY＝ϕ，すなわち目的語名詞句を直後に従える純粋な他動詞の場合がある。これは受動文の最も基本的な型であり，それは先に見たとおりである。図式化して示せば次のようになる。

(16)　$NP^{\wedge}+V+NP_1 \longleftrightarrow NP_1+be+V\text{-}en$　（+by $NP^{\wedge}$）

代表的な類例を挙げる。

(17) a. John sharpened the knife.
　　b. The knife was sharpened by John.
(18) a. Mary wrote this letter.
　　b. This letter was written by Mary.
(19) a. Fred loves Nancy.
　　b. Nancy is loved by Fred.
(20) a. John admires sincerity.
　　b. Sincerity is admired by John.
(21) a. Not all of them understood my intention.
　　b. My intention was not understood by all of them.

これらの例を見てわかることは，受動化が適用される他動詞構文といっても動詞とその主語および目的語の間の意味関係には当然のことながら様々なものがあり，受動化自体はこうした意味関係とは無関係に適用されるということである。

これと同じパタンとして$V\text{-}NP_1\text{-}P\text{-}NP_2$の受動化というケースがあるが，この場合には（22）のように一般にNP_1だけが受動文の主語になれる。NP_1としては様々な名詞句が生起可能ということから，$V\text{-}NP_1\text{-}P$の部分をVYとすると，これは固定した「意味的単位」をなすという条件に反するのは明らかである。したがってChomsky設定した条件によってこの事実は一応保証される（ただし，後述の特殊なイディオムの場合参照）。また現在の統率と束縛理論の枠組みでは，格理論，すなわち格付与に対する「隣接性の条件」によって確実にこれらの例は説明できる。

(22) a. $NP^{\wedge}+V+NP_1+P+NP_2 \longleftrightarrow NP_1+be+V\text{-}en+P+NP_2$（+by $NP^{\wedge}$）

b. $NP^{\wedge}+V+NP_1+P+NP_2 \longleftrightarrow {}^{*}NP_2+be+V\text{-}en+NP_1+P$ (+by $NP^{\wedge}$)

(23) a. The government provided those people with much food.
b. Those people were provided with much food by the government.
c.*Much food was provided those people with by the government.

(24) a. The gang robbed her of her necklace.
b. She was robbed of her necklace by the gang.
c.*Her nacklace was robbed her of by the gang.

(25) a. The gang stole her necklace from her house.
b. Her necklace was stolen from her house by the gang.
c.*Her house was stolen her necklace from by the gang.

(26) a. She took me for my brother.
b. I was taken for my brother.
c.*My brother was taken me for.

3.2.

次にY＝P (reposition) の場合，すなわちV＋Pがいわゆる「複合動詞」（あるいは，イディオム）をなす場合がある。これらの受動文は，一般に「疑似受動文」(psuedo-passive) または「前置詞受動文」(prepositional passive) と呼ばれる。

(27) $NP^{\wedge}+V+P+NP_1 \longleftrightarrow NP_1+be+V\text{-}en+P$ (+by $NP^{\wedge}$)

(28) a. Many people looked at the picture.
b. That picture was looked at by many people.

(29) a. They searched for the victim.
b. The victim was searched for.

(30) a. The director insisted on the scene.
b. The scene was insisted on by the director.

(31) a. Tom telephoned to Martha.
b. Martha was telephoned to by Tom.

これらの受動文と次のような受動文とは区別しなければならない。

(32) a. They have called off the strike.
b. The strike has been called off.

(33) a. They put off their wedding until next month.
b. Their wedding was put off until next month.

(32a)(33a) では，能動文において次の (34) ような語順も許されるので前置詞受動ではない。これは「動詞＋副詞」からなる「句動詞」(phrasal verb) の構文であり，副詞は目的語の直後へ移動可能である。

(34) a. They have called the strike off.
b. They put their wedding off until next month.

それに対して，「動詞＋前置詞」の場合にはそのような語順は許されない。

(35) a.*Many people looked the picture at.
b.*They searched the victim for.

したがって，この「動詞＋副詞」のパタンはどちらかと言うと (16) のY＝ϕ の場合と同じと考えた方がよい。

さてこの疑似受動文は，有標の構文であり一般の受動文よりもずっと厳しい制限のもとに置かれる。周知のようにV＋Pという連鎖のすべてが受動態になるわけではない。詳述は避けるが，次のような語彙的な制限がある (cf. 遠藤 1986, 秋山 1986)。

(36) a.*The station was arrived at by Susan.
b.*The lake is camped beside.
c.*Elaine was sung with by Ted in the contest.
d.*The living room has been exercised in by Mary.

(37) a. The conclusion was arrived at by all the pupil.
b. The cabbie was argued with by the bus driver for half an hour.
c. The bed has been slept in again by that flea-bitten dog.

3.3.

次にY＝副詞的小詞 (Adverbial Particle)＋Pの場合がある。これも複合動詞（イディオム）の場合と言える。

(38) a. These tantrums could not be put up with any longer.
b. The death penalty has been recently done

away with.

c. Such problems must be squarely faced up to.

d. They were looked down on by their neighbours. (Greenbaum and Quirk 1990 : 342)

これらの場合は，前述の「動詞＋前置詞」の場合よりもはるかにイディオム性が強い。当然これらにかんしては，受動化可能ではないものも多く存在する（cf. Quirk *et al*. 1985)。

3.4.

最後に先にも触れた，VY に対応する部分が V＋NP＋P からなる特殊なイディオムの場合がある。これは，前述のように $V+NP_1+P+NP_2$ における NP_2 の受動化にあたる。

(39) a. My aunt took care of me.
b. I was taken care of by my aunt.

(40) a. John took advantage of Mary.
b. Mary was taken advantage of by John.

(41) a. You should pay (great) attention to these points.
b. These points should be paid (great) attention to.

(42) a. Suddenly we caught sight of the lifeboat.
b. The lifeboat was suddenly caught sight of.

この場合には，NP_2 が受動文の主語になれるという点で特殊である。一般に格付与にかんしては「隣接性の条件」(adjacency condition) が（少なくとも英語においては）仮定されるので，「格フィルタ」を満たすためには，これらの例では $V+NP_1+P$ の全体が V，すなわち「複合動詞」とになっていると考える必要がある。実際これらのイディオムでは，NP_1 が普通の目的語名詞句とは異なり指示的意味を持たないという特徴があることがしばしば指摘されている（Postal 1986, 安井 1989 など)。したがって正確にはこのイディオムの構造は V＋N＋P と考えた方がよい。さらには，その意味が非合成的 (non-compositional) でありそれぞれの語の独立した意味からイディオム全体の持つ意味が一般には推測できない。したがって，こうしたイディオムは辞書 (lexion) で V というカテゴリの単一の語彙項目として登録されており，それに受動化の形態規則が適用され，(7) で示したような受動分詞として受動文の D-構造に挿入されると考えられる。そのために NP_2 がそのイディオム動詞の目的語となっているために，普通の他動詞の場合同様に受動化が許されるのである。それと同時に NP_1 にあたる名詞 N を主語とするような受動文は非文法的になることも，単一の語の中の一部のみを移動させることができないという一般原則から説明可能となる。

(43) a. They made fun of Jerome.
b. Jerome was made fun of.
c.*Fun was made of Jerome.

(44) a. The agents caught sight of her.
b. She was caught sight of by the agents.
c.*Sight was caught of by the agents.

(45) a. They took advantage of Jerome.
b. Jerome was taken advantage of.
c.*Advantage was taken of Jerome.
(Postal 1986 : 239f.)

（あるいは Hornstein and Weinberg (1981) が主張するように，D-構造において統語変形規則の適用以前の段階で「再分析」(reanalysis) が行われるのかもしれない。）ただこれらのイディオムでもその内部の名詞に修飾語がつくと，その名詞句を主語とした受動文が可能になるという事実がある。この場合には，形容詞などの修飾語がつくということがその名詞が指示性を持つに至っている，したがって名詞句 NP であることを示している。したがってその場合には普通の $V+NP_1+[_{PP}P+NP_2]$ という構造をしていると言える[6]。そのために逆に NP_2 を主語とするような受動文の文法性が下がるものと考えられる[7]。

(46) Great attention should be paid to these points.

(47) a. A terrible mess has been made of the house.
b. (?)The house has been made a terrible mess of. (Greenbaum and Quirk 1990 : 341)

(48) a. They took unfair advantage of Jerome.
b. Unfair advantage was taken of Jerome.
c.? Jerome was taken unfair advantage of.
(Postal 1986 : 236)

以上で（具象名詞句を主語とする受動文の）基本的な統語パタンを概観してきたことになるが，これにかんしては，初期の方法も，現在の方法も，適当な補助仮説を導入することで基本的にはすべてうまく処理することができると言えるだろう。次節では，ここで見

た基本パタンに適合していながら，受動化を受けない例外的なものを考察する。そうした文まで考慮に入れた場合，第2節で提示した統語分析には，過剰生成という問題があるということになる。

4. 統語分析の例外

前節において単文の受動文における統語的パタンにどのようなものがあるかを概観してきたわけだが，本節ではその中でも特に，(1) の受動化変形規則における VY の連鎖における Y が ϕ である，すなわち動詞が単純な直接目的語をとるにもかかわらず受動化の例外となるものと，それらにみられる共通性について考察する。その後に次節で疑似受動文の例外とその分析方法について検討することにしたい。

4.1. 叙述名詞句（predicate nominal）の場合

まず以下の例文について考えてみよう。

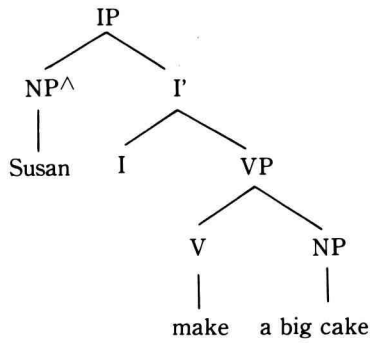
(49) Susan made a big cake.
(50) Susan made a good wife.

(49) と (50) の統語構造はいずれも NP^-V-NP で 3.1. で見たものと同じであり，受動化の変形規則の構造記述を満たしている。したがってすべて受動文になるはずだが，実際にはそうならず (50) に対応する受動文は非文法的である。

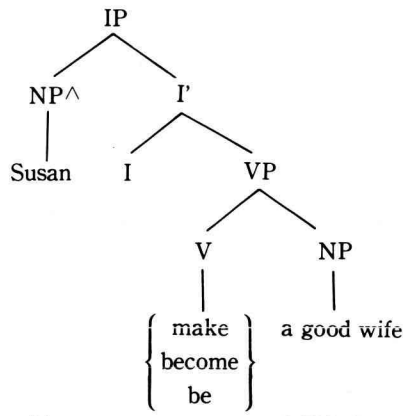
(51) This big cake was made by Susan.
(52) *A good wife was made by Susan.

もっとも，伝統文法では，(50) の make は不完全自動詞とされ，それに続く名詞句は主格補語となる叙述名詞（predicate nominal）とされ，受動化の対象にはならないとされるので，例外とはならないと言えるかもしれないが，Chomsky (1965) で主張されているように，文法関係は統語表示には用いられず，変形規則はそれを利用できないとすると，自動詞・他動詞の区別なく受動化（あるいは名詞句移動）は動詞の直後の名詞句に適用されることになり，やはり例外となる。

(53)



(54)



同じことが become, turn についても言える。

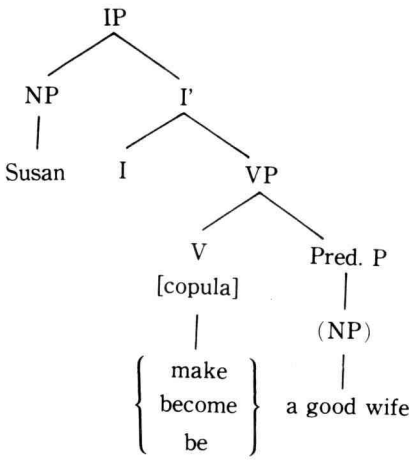
(55) a. Tadpoles become frogs.
　　b.*Frogs are become by tadpoles.
(56) a. George turned traitor.
　　b.*(The) traitor was turned by George.

さらに同様な例として次のようなものがある（from Allerton 1982: 87, 99, 100)。

(57) a. Oliver remained a thief.
　　b.*A thief was remained by Oliver.
(58) a. Oliver became a linguistics student.
　　b.*A linguistic student was become by Oliver.
(59) a. Oliver sounded an expert.
　　b.*An expert was sounded by Oliver.
(60) a. Oliver seemed (to be) the perfect gentleman.
　　b.*The perfect gentleman was seemed (to be) by Oliver.
(61) a. Oliver made an excellent policeman.
　　b.*An excellent policeman was made by Oliver.[8]

これらの例外を処理するためには，初期の句構造規則でのように（Lees 1960 参照），あるいは「一般化句構造文法」（Generalized Phrase Structure Grammar：GPSG）でのように Pred（述部）という節点を仮定すれば区別は可能である（Gazdar *et al*. 1985 参照）。

(62)



しかしながら，(62) のような表示を採用することは文法関係を文法記述の中に持ち込むことになり好ましくない。叙述名詞句には他にも，定性（definiteness）の問題や，内部要素の摘出が比較的容易であるなどの問題があり，通常の名詞句とは統語的な振る舞いが異なるので，その点から通常の名詞句とは異なり格を必要としないと考えることも可能である。そうすれば主格補語をとる動詞は後続の名詞句に目的格を与えないので受動分詞にならないと言うことが説明できる。ただこの点にかんしてはさらに検討が必要である。

4.2.　動詞の意味的特徴

4.2.1.　状態動詞と行為動詞による区別

一般に，行為の対象となる目的語（Patient）と結果の目的語（Result）が最も受動化を受け易いと言われている（Brown and Miller 1991：297）。これらの目的語は，典型的には動作主（Agent/Actor）を主語とする行為動詞（action verb/dynamic verb）とともに現れる。したがって動作主を主語としない状態動詞（stative verb）は受動化を受けにくいと考えるのは不自然ではない（Stein 1979）[9]。しかし，実際には状態動詞の中にも受動文となるものはたくさんあり，この一般化は明らかに正しくない。

(63)

a.　Jack is { liked / loved / adored / hated / despised / admired } by many people.

b.　The results were { believed / understood / doubted / suspected } by everyone.

Stein（1979）は，行為動詞（verbs of activity）のみが受動化されると言い，「動詞の表す意味が外界に何らかの影響を及ぼすもの」を行為動詞であると考え，上の例も行為動詞であるとする。しかし，これはやや強引な分析でありこれらの動詞はどうみても行為動詞ではない（命令文や進行形などの状態動詞判定の統語テストをしてみればすぐわかる）。さらに，次にみるように行為動詞でも受動化が適用できない場合も多々あるので，受動化の可能性を動詞の行為・状態の区別で説明しようとすることは無理である（Siewierska 1984：190）。

(64)　a. John left the room.
　　b.*The room was left by John.

(65)　a. The prisoner escaped the jailer.
　　b.*The jailer was escaped by the prisoner.

(66)　a. John turned the corner.
　　b.*The corner was turned by John.

これらはむしろ受動文の主語が〈影響〉を受けたかどうかにかかわっていると言える。たとえば，次の例では，同じ動詞でも受動文において何らかの影響を受けていると見られるもののみが容認されるということを示している（Bolinger 1977）。

(67)　a. The army was deserted by its commander-in-chief.
　　b.*The army was deserted by Private Smith.

(68)　a. The stairs have been run up so much that the carpet is threadbare.
　　b.*The stairs have been run up by Jane.

ただし，(63a) において Jack が「心理的な影響を受ける」から受動文が可能であるという説明は，説得力が弱い。状態動詞が対象に影響を与えるということが不

自然である。特に（63b）での the results が何らかの影響を受けるとはとうてい考えられない。

4.3. 中間動詞（Middle Verbs）

一部の状態動詞は受動態にならないということはよく知られている。一般にはこれらはその動詞の本質的意味が受動化に抵抗するために受動態を持たないとされている。たとえば，Lees（1960）はこうした一群の動詞を「中間動詞」と呼び，受動変形の例外として動詞そのものを指定しておくという方法で過剰生成を防ごうと試みた。ここでは，そうした中間動詞と呼ばれる動詞を含む非文法的とされる受動文を考察し，それらがどのような特性を持つか検討する。

4.3.1. 対称動詞（Symmetric Verbs）

まず，resemble, meet, marry, fit, match, suit, equal などの対称動詞と呼ばれる動詞について見てみよう。対称動詞とは次の例のように，主語と目的語を交換してもその文の意味が変わらないような動詞を指す。

(69) a. John resembles Mary.
　　b. Mary resembles John.

これらの動詞を含む文はまた次のように言い換えることもできる。

(70) a. John and Mary resemble each other.
　　b. Mary and John resemble each other

同じことが次の meet, figth についても言える。

(71) a. John met Mary in front of the city hall.
　　b. Mary met John in fornt of the city hall.
(72) a. John fought Tom yesterday.
　　b. Tom fought John yesterday.

これらの動詞は他動性（transitivity）を持たないという動詞の意味的性質ゆえに通常受動態を持たないと言われている[10]。

(73) a.*Mary is resembled by John.
　　b.*Tom was fought by John yesterday.
　　c.*John was met by Mary in front of the city hall.

もちろん meet が「出迎える」という行為の意味の場合は対称動詞ではないので受動態は可能である。したがって次の（74）ような例は，能動態では両義的（ambiguous）であるが，受動態になるとその両義性は消失する。

(74) a. John met Mary at the station.（AMBIGUOUS）
　　b. Mary was met（by John）at the station.（UNAMBIGOUS）

fight も目的語が「戦う相手」ではない次のような場合には対称的ではないので受動態を許す。

(75) a. Tom fought a fierce battle（in 1979）.
　　b. The fierce battle was fought in 1979.

marry についても同じことが言える。

(76) a. Oliver married Elizabeth.[11]
　　b. Elizabeth married Oliver.
　　c.*Elizabeth was married by Oliver.

対称動詞の例としてさらに次のようなものがある（Allerton 1982：83）[12]。

(77) a. The nut fitted the bolt.
　　b.*The bolt was fitted by the nut.
(78) a. The cutrains matched the carpet.
　　b.*The carpet was matched by the carpet.
(79) a. The square on the hypotenuse equals the sum of the squares on the two non-hypotenuse sides.
　　b.*The sum of the squares on the non-hypotenuse sides is equaled by the square on the hypotenuse.

このように対称動詞は他動性が欠如しているというその語彙的性質から一般に受動化を受けないとされているが，Rice（1987）によれば対称動詞である resemble でも受動化が許されることもあるとして，次のような例を挙げている（p. 430）。

(80) a. Tommy resembles the milkman.
　　b.*The milkman is resembled by Tommy.
　　c. The milkman used to be resembled by Tommy.
　　d. The milkman isn't resembled by Tommy at all!
　　e. The milkman couldn't possibly be resembled by Tommy.
　　f. The milkman is unmistakenly resembled by

Tommy.

g. Everyone can be resembled by someone.

(80c) から (80g) ではそれぞれ，過去時制，否定，副詞，叙法などによって話者の認知における文全体の表す内容「他動性」が高くなり受動化が許されることになるのである。これらの例は受動化の可能性の問題が動詞の意味特性だけからは決定できないことを示している。同様のことが meet についても観察される。

(81) a. Tell me why I had to meet yeu.
b. Tell me why I had to be met by you.

この場合，have to という法助動詞に等しい意味をもつ要素が文に加わることで主語への義務性が生じて meet の対称性が崩れ，そのために受動態が許されることになると考えられる（ただし，受動態では当然のことながら義務性が関与するのは派生主語になるが）。

こうした現象は，従来の言語学的な概念だけでは分析不可能であり，人間の認知を構成していると思われる言語外的要素をも含めたモデル的概念を利用する必要があることを示唆している。

4.3.2. 計量動詞 (Metric Verbs)

目的語に数量・距離・時間などを表す名詞句をとる計量動詞を含む文の特徴は，能動文での主語が意志を持たない（すなわち動作主ではない）ということである。この点から，主語に意志はないので受動文にならないと考える者もいれば (Shibatani 1985)，あるいはこれらの動詞の目的語は通常の他動詞の目的語とは異なり数量を表す副詞的なものなので名詞句移動を受けないと考える者もいる (Allerton 1982, 鈴木 1990)。

(82) a. The book costs five dollars.
b.*Five dollars is/are cost by the book.

(83) a. Grace weighed only 46 kg.
b.*46 kg were weighed by Grace.

また Jackendoff (1972) によればこれらの目的語は「場所格」(Location) であり，通常の他動詞の目的語とは性質の異なるものであるという。これらの目的語が「場所格」であることは次のような言い換えが可能なことからも支持される。

(84) The champ weighed in at 654 pounds.

(85) I wouldn't buy orange at 25 cents apiece.

(Jackendoff 1972)

もちろんこれらの動詞も主語が動作主となるような場合，すなわち行為動詞となる場合には受動態を許す。

(86) a. Tom weighed the gold.
b. The gold was weighed by Tom.

しかしながらこれらの例はむしろ，後述の目的語の性質によって受動態を許さない場合に等しいと考えられる。

4.3.3. 静的な関係を表す動詞 (Verbs of Static Relationship)

中間動詞の中には他にも「静的な関係を表す」ような動詞があり，それには大きく分けて「所有関係」を表す have, possess, lack などと，「位置関係」を表す hold, contain, include などがある。他にも，equal もここに含まれるとしてよいであろう。

これらの動詞を伴う文は，能動態の主語が「場所」を表わす，一種の「存在文」と考えることができ，Bolinger (1975)，安井 (1989) が述べるように，存在・非在にかんする表現は受動態にならないということが成り立つので，受動態は一般に許されない。

(87) a. Mary has three brothers.
b.*Three brothers are had by Mary.

同じく possess も所有を表す場合には受動態が許されない。

(88) a. That child possesses an excellent ability to read.
b.*An excellent ability to read is possessed by the child.

ただし own については have と同じく所有を表しても受動態が可能である。

(89) a. A convertible is owned by John.
b. Convertibles are owned only by affluent young people.

これは have とは異なり own が単なる所有の状態を表すのではなく，何らかの行為の結果としての所有を表すからであり，能動態の主語に「動作主」性が感じられるからである (cf. Dixon 1991, 安井 1989)[13]。

同じことが「欠如＝非所有（非在）」を表す動詞 lack についても当てはまる（ただし，lack の場合はこの受動文の欠如を lacking という形容詞が補っている）。

(90) a. That family sorely lack brains.
b.*Brains are sorely lacked by that family.
cf. Brains are sorely lacking in that family.

次に静的な関係の例として，広い意味での位置関係を表す動詞を見てみよう。

(91) a. The jar holds oil.
b.?Oil is held by the jar.
(92) a. The carton contains milk.
b.*Milk is contained by the carton.
cf. No milk is contained in this box.
(93) a. This book includes many illustrations.
b.*Many illustrations are included by this book.

これらの動詞も能動文の主語が動作主であるような場合には受動態が許される。

(94) a. The police held the thief.
b. The thief was held by the police.
(95) a. The author included many illustrations in this book.
b.?Many illustrations were included by the author in this book.

また contain についても動的な解釈が可能な場合には受動態が可能であることが指摘されている（Rice 1987 : 431)。

(96) a. The lake was contained by the dam.
b. The demonstrators were contained by the police.

include については次のような例がみられるが，これはここで扱っている名詞句移動による統語的受動ではなく，いわゆる形容詞受動であると考えられる。したがって (97a) の in this book は (95) でのそれと同じく場所を表す副詞句であり，これは受動化とは無関係である。

(97) a. Many illustrations are included in this book.
b. Price 10 dollars, tax included.

他にも同様の性質を示す動詞に fit, suit, comprise, depend on, result from, relate to などがある（Dixon 1991)。

(98) a. That news related to my father.
b.*My father was related to by the news.

comprise にかんしては事情はやや複雑である。

(99) a. Our class comprises twenty sutudents.
b.*Twenty students are comprised by our class.
cf. Twenty students are comprised in our class.
(100) a. Fifty states comprise the United States of America.
b.*The United States of America is comprised by fifty states.
cf. The United States of America is comprised of fifty states.

(99) の comprise は「包含」（=include）を意味し，一方 (100) の comprise は「構成」（=compose, make up）の意味を持つ[14]。ここでも，前述の include 同様それぞれ c. の文は形容詞受動であり，受動化とは関係がないと考えられる。

depend on にかんしては (101) のように人間が主語になる count on, rely on の意味では受動態が可能である。

(101) a. Mary depends heavily on John.
b. John is heavily depended on by Mary.
(102) a. Our success depends heavily on your endeavour.
b.*Your endeavour is heavily depended on by our successs.

equal にかんしても同様なことが言える。

(103) a. Two and three equals four.
b.*Four equals two and three.
c.*Four is equalled by two and three.
(104) a. Fred equalled Tom's time.
b. Tom set up a new world record, but it was equalled by Fred the next month.
(Dixon 1991 : 308)

result from についてはこれと対称的な意味を表す result in があるので受動態が不要となるのではないかとも考えられる。これはちょうど lack に lacking という形容詞があるのと同じである（これは語形成における「阻止現象」(blocking effect) に等しい現象といえるかもしれない)。

(105) a. The fire resulted from John's failure to stamp out the cigarette completely.
b.*John's failure to stamp out the cigarette completely was resulted from by the fire.
cf. ?John's failure to stamp out the cigarette completely resluted in the fire.

このように静的な位置関係を表す動詞は，一見その本質的意味によって受動化の例外となるように見えるが，実際には動詞以外の要素，とりわけ主語の名詞句の指示物いかんによると思われ，動詞そのものによって例外を処理するのは妥当性に欠けると思われる。さらには，こうした動詞の意味的な特性によってこれらの例外を処理することには，統語論の自律性を犠牲にするという方法論的な問題の他にも，今ひとつ大きな問題点がある。それは，enclose, encircle, surround, ring などの contain と同じく静的な位置関係を表すと考えられる動詞が比較的容易に受動化を受けるという事実である。

(106) a. My house is encircled by (the) trees.
b. The castle is surrounded by a mort.
c. The pool is enclosed by the fence.
d. The city is ringed by its suburbs.

Lagnacker (1986, 1991), Rice (1987) などの「認知文法」(Cognitive Grammar)を展開している者達によれば，これらの動詞にかんしては cantain などとは異なり，「主観的動き」(subjective motion) が感じられる（すなわち，他動性 (transitivity) が高いと感じられる）からだと言うが，それは，これらの動詞が能動態で動作主を主語にとる構文を許す事と関連しているように思われる。

(107) a. The enemy surrounded our fortress.
b. The moon encricles the earth.

contain にはこうした用法が欠けていることに注意されたい[15]。

4.3.5. 心理動詞 (Psych-Verbs)

ここでは能動態で主として人間を主語にするが，行為ではなく心的状態を表す様な動詞について考察する[16]。まず Halliday (1985 : 136) や Dixon (1991 : 312f.) などで指摘されている次のような例を考えてみたい。

(108) a. Mary likes dogs.
b.?* Dogs are liked by Mary.

like の様な動詞が受動態で用いられにくいというのは以外かもしれない。だがこのことは like 自体が受動化の適用を受けないということではない。(94)の様な場合は like 自体よりもむしろ受動文における派生主語が不定名詞句であるという事実によっているところが大きい。定名詞句を用いた場合には問題はない[17]。

(109) This dog is liked by every boy and girl in this neighborhood.

これらの動詞は能動態の主語として「動作主」はとらないので受動化の典型的な入力とはなりにくいが，人間を主語にするという点で他動性の際だっている英語においては派生的に受動化を許すものであると言える (cf. Shibatani 1985)。そういう意味でも受動化に対する制限が普通より厳しくなることは当然であると言えよう。

さらにこれらの動詞は話者中心のいわゆる「私的動詞」(personal verb) であるために，実際には1人称主語とともに用いられることが多く，その場合はとくに受動態になりにくいために，一般に受動態で用いにくいと感じられるのではないかと推測される。その典型的な例が want であり，次の例が示すように want の受動態は特殊な意味であるのが普通である[18]。

(110) a. You're wanted on the phone.
b. Wanted : dead or alive.

Rice (1987) は know と mind にかんして非常に興味深い観察をしている。これらの心理動詞はそのままでは一般に受動化が許されないが，resemble のところで見たような要因が加わると受動態の容認性が高まるということである。

(111) a.* The couple next door is known by John.
b.?The couple next door was known by John.
c.? The couple next door is not known by John.
d. The couple next door is thoroughly known by John.
e. The couple next door should be known buy John (since he married their daughter).

(112) a.**Pat's smoking is minded by Sam.
b.??Pat's smoking was minded by Sam.
c. ?Pat's smoking is scarcely minded by Sam.

d. Pat's smoking might be minded by Sam (because he's got emphysema).

このように心理動詞の受動化にかんしてはそれが単に例外になるというのではなく，言語運用上の特性をも考慮する必要があり，条件さえあえば受動化が可能であることがわかる。

4.4. 目的語の性質と受動化

これまでは動詞の意味的特徴をもとに受動化の例外となるものを考察してきたが，単に動詞自体の意味だけからは十分なことは判明しないことが明らかになったことと思われる。そこで今度は，動詞ではなくそれとともに文を構成している要素の特性が受動化の可能性にどのように関与しているか考えてみたい。

一口に他動詞の目的語といっても，その名詞句と動詞との間の関係にはさまざまなものがある。先にも触れたように受動化の可能性はこうした動詞とその目的語との間の意味的関係にかかわっている場合が多い。ここでは，そのような観点から，一般に受動態が可能な行為動詞でも，目的語の性質によって受動化が制限されるような場合を考察し，それらの間に何らかの一般性が見られるか考えてみる。

4.4.1. 行為動詞でも受動化が許されない場合：副詞的な目的語の場合

以下の一連の例を見ると他動性が高いと言われる行為動詞においても目的語の性質によって受動化の可能性に差が見られることが，とりわけ目的語が場所を表すもののときに受動化が妨げられることがわかる。

(113) a. John turned the page.
b. The page was turned by John.
(114) a. George turned the corner.
b.?The corner was turned by George.
(115) a. The surveyor paced the distance between the two points.
b. The distance between the two points was paced by the surveyor.
(116) a. Mary paced the floor.
b.*The floor was paced by Mary.
(117) a. They approached the danger cautiously.
b. The danger was approached cautiously by them.
(118) a. The train approached the station.
b.*The station was approached by the train.
(119) a. The thief entered the house. (enter=break into)
b. The house was entered by the thief.
(120) a. Fred left Mary at the station.
b. Fred left your bicycle at the station.
c. Fred left the office at five o'clock.
(121) a. Mary was left (by Fred) at the station.
b. Your bicycle was left (by Fred) at the station.
c.* The office was left (by Fred) at five o'clock.

このような現象の原因として，目的語が一見したところ名詞句であるように思われる場合でも，それが副詞的である場合には受動文の主語にはなれない，という指摘が鈴木（1990：236）でなされている（cf. Allerton 1982, Dixon 1991）。

(122) a. John left a lot of wine for us.
b. A lot of wine was left for us by John.
(123) a. John left London for Paris.
b.*London was left for Paris by John.

まず，(120c)(121c)や(123)の「(場所から)去る」という意味の leave の目的語は代用形にした場合，副詞の here, there が用いられる。

(124) a. John left it for us.
b. John left here for us.

また，疑問詞でも副詞の where が用いられる。

(125) a. What did John lave for us?
b.*What did John leave for Paris?
c. Where did John leave for Paris.

同じような現象が次の arrive at にも見られる。

(126) a. Tom and Jerry arrived at the same conclusion.
b. The same conclusion was arrived at Tom and Jerry.
(127) a. Tom and Jerry arrived at the party at six.
b.*The party was arrived at six by Tom and Jerry.
(128) a.??Tom and Jerry arrived at it.
b. Tom and Jerry arrived there at six.

さらに鈴本は，中間動詞（middle verb）（cf. Lees 1960, Keyser & Roeper 1984）の目的語も副詞的であることを指摘する。

(129) a. This car costs five thousand dollars.
　　b. This letter weighs forty-one dollars.
(130) a. How much does this car cost?
　　b. How much does this letter weigh?
(131) a.* Five thousand dollars are cost by this car.
　　b.*Forty-one grams are weighed by this car.

しかしながらこの分析には次のような問題がある。まず，「副詞的名詞句」という概念が曖昧である。これらの場合は Larson（1985）の主張する「裸名詞句副詞」（bare NP adverb）とはまったく別のものである。また leave の場合はいざ知らず，cost, weigh の目的語はやはり名詞句である。how much も how much money, how much weight という名詞句の省略的表現であると言えるからである。実際，Quirk *et al*.（1985：1177）ではこれらの動詞を用いた疑問文では what も良いとしている。

(132) What did that car cost?

もっともこの場合は，次のような例の類推的拡張かもしれないが。

(133) a. How much is the price?
　　b. What's the price?

第二に，どのみちこうした例外は Jackendoff（1972）や Bolinger（1975, 1977）の分析にしたがえば他の現象と一緒に処理することが可能である〈19〉。

4.5.　能動文の主語の特徴：by-phrase の特徴

行為動詞でも受動態の by-句に主題（Theme）が生じるとその受動文は非文法的になる（Jackendoff 1972）。逆に言えば，受動態が可能なのは，能動文の主語が「動作主」であるときのみであることになる（cf. Shibatani 1985）。

行為動詞でも主語に意志（volition）が見られないとその主語は「動作主」ではなく，単に移動するものとして「主題」となるので，受動文とはならない。たとえば，次の例で touch という動詞は主語の行為に対する意志を必要とし，その主語は「動作主」である読みしかないが，hit には意志を持ってなにかを「叩く」という意味と，ただ単になにかに「ぶつかる」という意志を必要としない意味がある。そのため能動文の（135）は二通りの意味を持つ曖昧文だが，それが受動態になると，有意志の動作主を持つ「叩く」という解釈しか出てこないということを Jackendoff（1972）が観察している。

(134) John was touching the bookcase.
　　[Agent]　　[Theme]
(135) John hit the car with a crash.（AMBIGUOUS）
　　a.「ジョンは大きな音をたてて車を叩いた」
　　[Agent]　　[Theme]
　　b.「ジョンは大きな音をたてて車にぶつかった」
　　[Theme]　　[Location/Goal]
　　〈Agent〉
(136) The bookcase was being touched *by John*.
(137) The car was hit *by John*（? with a crash）.
　　[Agent]

（135）が a. b. 両義的であるのに対して，（137）は「その車は（大きな音をたてて）ジョンに叩かれた」という意味しか持たない。これはつまり，能動文の主語が「主題」である場合には受動文にならないということを意味している。

さらに，同じ動詞でも主語が変わると受動化の可能性も変わることは次の例文からもわかる。今度はどちらも主語は無生物であるので，ともに無意志であり，動作主にはなれないはずである。ところが，the falling rock の方が the tree よりも受動化を受け易いということがある（Jackendoff 1972）。

(138) a. The tree was touching the wire.
　　b.*The wire was being touched by the tree.
(139) a. *The falling rock* hit *the car* with a crash.
　　[Theme]　　[Location/Goal]
　　b.?The car was hit by the falling rock（with a crash）.

（138）の受動文が非文法的で，（139）の方の文の容認度が上がるのは，同じく無生物でも車のように自ら「動くもの」の方が「動作主」性が高いと人間の目からは見えるからである。

さて，この論法では，受動文の by-句はすべて動作主になるということになるが，実際にはそうではない（Marantz 1984, Jaeggli 1986, Baker *et al*. 1990 参照）。

(140) a. Hortense was pushed by *Elmer* (AGENT)
b. Elmer was seen by *everyone who entered.* (EXPERIENCER)
c. The intersection was approached by *five cars* at once. (THEME)
d. The porcupine crate was received by *Elmer's firm*. (GOAL)
e. The house is surrounded by *trees*. (LOCATION?) (Marantz 1984 : 129)

Shibatani (1985) も，受動化は基本的に能動文の主語として動作主をとるもののみが可能であるとしているが，彼の分析では「経験者」(Experiencer)，「道具格」(Instrument) なども派生的に「動作主」の概念が拡張された場合として受動化が許されると言うことができる。

したがって (140) では「経験者」「道具格」「着点」(Goal)，さらには「場所」(Location) までが，拡張された「動作主」と解されることになる。これは，英語がかなり「動作主」中心の言語であることを示しており，(141) のように他動詞構文の主語の位置に置かれた名詞句はある程度述部動詞の種類に関係なくある程度「動作主」性をおびる傾向にあることを示している (cf. 池上 1991)。

(141) Mary is loved by *John*.
[Experiencer]
〈*via* extended application〉

(142) a. John resembles Bill.
b.*Bill is resembled by *John*.
[non-Agent] (＝Theme)

ただこの動作主という「原型」(prototype) の拡張は当然無制限なものではなく，次にみるように，いわゆる無生物主語構文などでは，たとえ動詞が受動化を許すような典型的な行為動詞でも受動化が認められないこともある (Shibatani 1985 : 831)。

(143) a. John bought this house for $250,000 in 1980.
b. This house was bought by John for $250,000 in 1980.

(144) a. $250,000 won't buy this kind of house any more.
b.*This kind of house won't be bought by $250,000 any more.

(145) a. John built this house for $250,000 in 1980.
b. This house was built by John for $250,000 in 1980.

(146) a. $250,000 won't build this kind of house any more.
b.*This kind of house won't be built by $250,000 any more.

こうした分析はたしかに興味あるものではあるが，拡張の度合いがどの程度のものかを判定する事がむずかしいと言う難点がある。もっとも，意味的な要因はなかなか把みどころがないので，自然言語そのものがそういった点でファジーであると言ってしまえばそれまでではあるが。

最後に Bolinger (1975) の指摘する例を見ておこう。次の例では by-句に生じる名詞句の指示物が大きいか・小さいかという点で受動文の容認性が変わるというものである (Siewerska 1984 からの引用)。

(147) a. The gas entered the house.
b.*The house was entered by the gas.
cf. John entered the room with his new girl friend.
*The room was entered by John with his new girl friend.

(148) a. The chairperson concluded the meeting.
b. The meeting was concluded by the chairperson.

(149) a. A magnificent banquet concluded the festivities.
b.*The festivities were concluded by a magnificent banquet.

5. 結　　語

本小論では，基本的な受動文の生成について，まず名詞句移動だけで受動文を派生するといった統語分析では，過剰生成が生じることを見た。それらの受動化の例外は，意味的・その他の観点からみて次のようないくつかの特徴を持つことを論じた。

1. 能動文の主語が動作主（典型的には有生物）ではないものは受動化されない。経験者，道具格，着点なども拡張的適用の対象となる。無生物でも移動能力があるものは，受動化を受け易くなる。
2. 能動文の目的語が動詞の表す意味から影響を受

けると受動化できる。したがって単なる場所など受動化されにくい。

cf. 存在文も受動化を受けない。have（安井 1989）Bolinger（1975）によれば「位置関係」と「存在・非在」はまったく影響を受けないので受動態にならないと言う。（中間動詞はある意味で存在・非在を表すと言える。安井稔（1979））

cf. 受動文の述部は，派生主語の特徴記述をするものであることが好しい。

3. 受動文の主語には定名詞句が好まれる。これは談話的制約であり，主語は一般に旧情報の位置であるからである。

4. by-句の指示物が大きかったり，強かったりすれば，それだけは派生主語は大きく影響を受けることになり，受動文の容認性は高くなると言える。

このように受動化の可能性を左右するいわゆる「他動性」を決定する要因はさまざまなものが絡んでいるのだが，こうした行為や影響という関係だけを考慮にいれたのでは次のような「状態」や「可能性」を述べている受動文について説明がつかない（前述の Rice の例文も参照）。

(150) a. Mary is loved by John.
　　b. John is disliked by Lucy.

(151) a. New York can be reached in two hours.
　　b.*New York was reached after three-hour drive.
　　cf. We reached New York after three-hour drive.

(152) a. A mile can't be run in four minutes.
　　b.*A mile was run by every student.

以上，英語の受動文は，単に他動詞の目的語が主語になるという統語的特徴以外にいくつもの特徴を兼ね備えており，それらが共謀していわゆる受動化の例外現象を生み出していることがわかった。

さて，このような諸特徴を持つ受動文の分析を，例外も含めて，文法でどのように扱うべきかについてであるが，ここでは現在の生成文法で採用されているモジュラーなモデルにしたがったひとつの分析法のあらましを述べて小論を結ぶこととしたい。基本的には，V＋NP, V＋P＋NP という統語構造からの名詞句移動をシンタクスではすべて許すことにする。疑似受動にかんしては，V＋P という連鎖の凍結度の段階に照らして「複合動詞」として辞書で V として記載されているものと，D-構造で V＋PP として基底生成されているものとを峻別することにすれば，上記のふたつの場合のみが受動文の入力形式となる。そのさい構造変化を伴うような強力な「再分析」は採用しない。それから意味部門にいって何等かの方法で「影響」を受けない主語をもつ受動文をフィルタ・アウトする。主語の特徴記述とか，by-句に現れる名詞句の指示物の大きさ・強さといった要素は言語話者の持つ常識などと言った言語外的な状況に依存するので，言語運用のレベルに属するものとして文法外で処理する。受動文の主語の定性といった問題は，一部意味論の問題でもあるが，やはり談話的要因も絡んでくるので，とりあえず文法外で処理する。といったようなモジュラーな処理方法が望ましい。このような立場に立てば，統語論（シンタクス）の自律性を保持したまま受動文の例外を処理できるものと思われる。ただ，本小論で扱った受動化の例外現象は，受動文における根本的な部分にかかわる問題であることには変わりないが，まだ一部の例外現象であるにすぎず他にもいくつかの問題がある[20]。またここに述べたことはあくまでもプログラマティックな解決法にすぎず，実際的・テクニカルな問題については今後さらに詳しい研究が必要である。

註

〈1〉 Bolinger（1975, 1977），Kuno（1980），Hopper and Thompson（1980），Shibatani（1985, 1988），Siewierska（1984），Dixon（1991）など。とくに Shibatani（1985：822）の次のような発言を参照。

> "Formal approach is too restrictive to account for the patterns of distribution which a passive morphology exhibits. A much broader pragmatic notion is required in order to account for the use of a passive morphology in a variety of constructions."

またこれとは別に，言語外現実全体にかんする人間の認知能力のモデルをもとに文法的現象を言語使用の観点から説明しようとする「認知文法」（Cognitive Grammar）を推進する Lagnacker たちのような言語学者たちは，さらにラディカルな立場をとっている。

〈2〉 同じ理由から（1）の変形規則は（2）から次のような非文法的な受動文を派生してしまうことも正しく阻止できる。

(i) *[The one with red hair]$_i$ was chosen the girl with blonde hair, not t_i.

〈3〉 Emonds (1976), Jackendoff (1977), Stowell (1981)などを参照。ただし，in that IP, except that IP といったような少数の例外もみられる。また，wh-要素を持つ疑問節は，that-節と同様 CP であるが，こちらは前に前置詞があっても良い（もちろん省略することも可能である）。

〈4〉 insist on などの前置詞が that-節の前では義務的に省略されることについては，音形部間（PF）での義務的削除規則を仮定すればよい。その規則は，概略，次のようなものとなる。

(i) X-P-CP-Y ⇒ X-ϕ-CP-Y

または，

(ii) Delete P/__ CP

ただし，後述の様に同じく CP でも間接疑問節 CP [+wh] の場合には前置詞の省略は随意的になるので多少の修正が必要にはなるが。

〈5〉 これは，能動-受動の関係が他動詞についてのみ当てはまることだから，当たり前のことで，特に説明の必要はないことであると思われるかもしれないが，ドイツ語，オランダ語では自動詞の受動態が可能であり，事実はそう単純なものではない（Jaeggli 1986 : 595）。

(i) a. Es wurde getanzt.
it was danced. (='There was dancing.')
b. Es wurde bis spät in die Nacht getrunken.
it was till late in the night drunk
(='Drinking went on till late last night.')

(ii) Er wort gelfloten.
it was whistled (='There was whistling.')

(iii) a. Es wurde gleacht.
it became laughed (='There was laughing.)
b. Es wird gegangen.
it becomes walked. (='There was walking.')

ただし，これらの言語でもすべて自動詞が受動文になるわけではない（Siewierska 1984 : 200-201）。

(iv) a.*An etwas wird erkrankt.
at something become sickened
(='Where is getting sick.')
b.*Es wird geschmeckt.
it becomes tasted (='There is tasting.')

こうした言語に見られる差異の分析・説明については Jaeggli (1986), Baker *et al*. (1990), 中村 (1991) などを参照。

〈6〉 Dixon (1991 : 317) は次のような例を，NP_2 が受動文の主語になる例外的現象として例示しているが，これらは明らかにここで扱っているイディオムである。なぜなら，これらに見られる NP_1 は無冠詞であったり，修飾を許さないものだったりするからである。

(i) a. Have you been shaken hands with *t* yet?
b.*Have you been shaken left hands with *t* yet?

こうした例は，意味的な考慮のみではこれらの現象を説明しきれないことを示唆している。

〈7〉 ただ中には，NP_1 を主語とする受動文もいっしょに許すものがある。

(i) a. The FBI kept tabs on John.
b. John was kept tabs on by the FBI.
c. Tabs were kept on John by the FBI.

こうした例は，変形生成文法の初期の頃（1960 年代）にしばしば変形規則としての受動化規則の存在の強力な根拠とされたものである。

〈8〉 remain, become, seem はその補部に名詞以外にも，形容詞をとることができるが，make は形容詞の補部をとれないという点で特殊である。しかし，make も後続の名詞が修飾語のない名詞句では非文法的である，すなわち何等かの形容詞を必要とするという点では自動詞的な性質があるといえる（cf. Allerton 1982 : 100）。

(i) *Oliver made excellent.
(ii) *Oliver made a policmen.

また become には他動詞の用法があるが，その場合も後述の静的関係を示す状態動詞であり，やはり受動態にはなりにくい。

(iii) a. Such words do not become a gentleman.
b.*A gentleman is not become by such words.

〈9〉 中間動詞は受動変形が適用できないばかりでなく，carefully などの様態の副詞（manner adverbs）と共起しないなどといった特徴を持つことが知られている。この特徴を利用して受動化の例外を処理しようとした試みとして Chomsky (1965) があるが，その分析には反例が多く，妥当なものではないことはよく知られている。

〈10〉 resemble と同じ意味の look like も look at, look for などとは異なり受動態を持たない。この理由は resemble と同じく意味的なものであると思われる。

(i) *Mary is looked like by John.

(ii) a. Mary wants to be looked at by every boy at the party.

b. A good teacher has been looked for for years.

ただ like は今でこそ前置詞であるとされることが多いが，near, worth とともに少数の目的語をとる形容詞であるとも考えられる。その場合にはこの説明は成り立たない。

〈11〉 marry については対称動詞の解釈があてはまるのは「オリヴァーはメアリと結婚した」というようにオリヴァーが花婿である場合のみである。marry の主語が花嫁の父親，神父などの場合は普通の他動詞となり，受動態が可能になる。

(i) a. The new vicar married the young couple.

b. The young couple was married by the new vicar.

また (76a) と同じ意味となる次のような例があるが，この場合 married は受動態分詞ではなく形容詞であると考えられる。

(ii) Elizabeth got married to Oliver.

このような Get＋過去分詞は，しばしば「get 受動態」と呼ばれるが，実はこの場合は動詞の過去分詞ではなく，形容詞である (Quirk *et al*. 1985：参照)。

〈12〉 もちろんこれらの動詞が非対称的な意味で通常の他動詞として用いられた場合には受動態は可能である。

(i) a. The new suit was fitted by the tailor.

b. The new reacord was equaled by Oliver.

c. The curtains were matched to the carpet by Oliver.

〈13〉 Dixon は (i) のような have は何らか所有の意味を持たず，この場合むしろ一時的に携帯している，あるいは利用しているという意味になる。所有の意味を表すにはむしろ belong to を用いると述べている。

(i) a.*John has that car.

(＝John is using that car)

b. John has that car today.

(＝John is using that car today)

c.*That car is had by John.

(ii) That car belongs to John. (Dixon 1991：308)

〈14〉 comprise は次の例文が示すように能動態のままでも受動態と同じ意味を表す，すなわち (100) と同じ意味を表すことができる (東 1990：226)。

(i) The United States of America comprises fifty states.

東はこうした述語を「両面述語」と呼んで，他にも abound in, be in charge of などを挙げている。

〈15〉 contain が人間を主語とする用法はある。しかし，それは動的な意味を持つものとはいえない。

(i) John was unable to contain his sorrow.

〈16〉 ここで扱う動詞は，よく日本語では能動態だが英語では慣用的に受動態が用いられるとされる surprise, please, satisfy などの動詞ではなく，Dixon (1991：309) が 'verbs inherertly focusing on the subject' と呼んだり，Rice (1987) が 'conceptual imperfactive verbs' と呼ぶような動詞である。

前者のような動詞にかんしては Belletti and Rizzi (1988, 1991) がイタリア語を例として，それらは通常の他動詞出はなく，むしろ自動詞に近い一種の非対格動詞 (unaccusative verb) であり移動変形によって派生される動詞的受動態を持つことがない。したがって，心理動詞の受動態には形容詞受動しか存在しないことを論じている (彼らの議論はイタリア語にかんしては説得力があるが，果たして英語でもそれがそのまま当てはまるかにはまだ検討の余地がある (cf. Baker *et al*. (1990) も参照)。ここでは一応彼らにしたがって，そうした動詞は議論しないこととする。

〈17〉 派生主語の定性にかんしては Fiengo (1974, 1980) を参照。話題化 (Topicalization) や tough-移動にも同じような制限がみられることはよく知られている。じつはこれ以外にも受動化と tough-移動構文には興味深い類似性が見られる (Allerton 1982, Postal 1991)。この問題および tough-移動構文にかんする最近の生成文法の分析では Nakamura (1991) が示唆的である。

〈18〉 日本語でもこれらの私的動詞は，1人称主語の場合にしかそのまま用いることができないという点で特殊である。

(i) a. ぼくは/わたしは音楽が好きだ。

b.?きみは/あなたたちは/太郎は音楽が好かだ。

(ii) a. ぼくは/わたしはあの車がほしい。

b.*きみは/あなたたちは/太郎はこの車がほしい。

c. きみは/あなたたちは/太郎はこの車がほしがっている。

(iii) a. ぼくは煙草を吸われるのがいやだ/気になる。

b.*きみは/あなたたちは/太郎は煙草を吸われるの

c. がいやだ/気になる。

きみは/あなたたちは/太郎は煙草を吸われるのがいやがっている。

〈19〉 Jackendoff (1972) によれば，これらの名詞句は，「場所」(Location) である。Brown and Miller (1991)

はこれらの名詞句に[Range]という意味役割をあてている。また安井（1989）はこれらの文は「中間構文」(Middle Construction）であり，「中間構文」は「ある意味で存在を表す存在文の一種」であり，存在・非在は「影響」(Bolingerの言うaffectedness）とはまったく無関係なので，受動化を受けないと述べている。

中間構文についてはさらにKeyser and Roeper（1984）を参照。

〈20〉 たとえば，Dixon（1991：281）に報味深い例が見られる。それはV＋PのPが省略されると受動文が可能になるという例である。これらについては，意味的には違いがないので，ここままここで述べたやり方では扱えない。

(i) a. They climbed up *a little hill*.
(**Oblique Locative**)
b. They climbed *high moutain*.
(**via promotion to Object**)

(ii) a.*That tall mountain hasn't yet been climbed up (by anyone).
b. That tall mountain hasn't yet been climbed (by anyone).

参照文献

秋本実治（1986）『英語イディオムの研究』篠崎書林，東京.

Allerton, D.J.（1982）*Valency and The English Verb*, Academic Press, London.

Baker, M.（1988）*Incorporation : A Theory of Grammatical Function Changing*, University of Chicago Press, Chicago, Illinois.

Baker, M., K. Johnson, and I. Roberts（1989）"Passive Arguments Raised," *Linguistic Inquiry* 20, 219-251.

Belletti, A. and L. Rizzi（1988）"Psych-Verbs and θ-Theory," *Natural Language and Linguistic Theory* 6, 291-352.

Belletti, A. and L. Rizzi（1991）"Notes on Psych-Verbs, θ-Theory, and Binding," in R. Freidin (ed.), *Principles and Parameters in Comparative Grammar*, MIT Press, Cambridge, Massachusetts.

Bolinger, D.（1975）"On the Passive in English," *The First LACUS Forum, 1974*, 57-80.

Bolinger, D.（1977）*Meaning and Form*, Longman, London.

Borer, H.（1984）"The Projection Principle and Rules of Morphology," *NELS* 14, 16-33.

Bresnan, J.（1978）"A Realistic Transformational Grammar," in M. Halle, J. Bresnan, and G. Miller, eds., *Linguistic Theory and Psychological Reality*, MIT Press, Cambridge, Massachusetts.

Bresnan, J. (ed.)（1982）*The Mental Representation of Grammatical Relations*, MIT Press, Cambridge, Massachusetts.

Bresnan, J.（1982a）"The Passive in Lexical Theory," in J. Bresnan, ed.（1982), 3-86.

Bresnan, J.（1982b）"Control and Complementation," in J. Bresnan, ed.（1982), 282-390.

Brown, K. and J. Miller（1991）*Syntax : A Linguistic Introduction to Sentence Structure*, 2nd edition, Harper Collins Academic, London.

Burzio, L.（1986）*Italian Syntax*, Reidel, Dordrecht.

Chomsky, N.（1965）*Aspects of the Theory of Syntax*, MIT Press, Cambridge, Massachusetts.

Chomsky, N.（1973）"Conditions on Transformation," in Chomsky（1977).

Chomsky, N.（1977）*Essays on Form and Interpretation*, North-Holland, Amsterdam.

Chomsky, N.（1981）*Lectures on Government and Binding*, Foris, Dordrecht.

Chomsky, N.（1986）*Barriers*, MIT Press, Cambridge, Massachusetts.

Davison, A.（1980）"Peculiar Passives," *Language* 56, 42-66.

Dixon, R.M.W.（1991）*A New Approach to English Grammar : On Semantic Principles*, Clarendon Press, Oxford.

Emonds, J.（1976）*A Transformational Approach to English Syntax*, Academic Press, New York.

Endo, Y.（1985）"On Passive : Three Properties of Psuedopassives," in K. Iwabe, and N. Kaga (eds.) *English Linguistics Today*（*TES*3), 169-180.

遠藤喜雄(1986)「疑似受動文の特徴」『英文学研究』第63巻.

Fiengo, R.（1980）*Surface Structure : The Interface of Autonomous Components*, Harvard University Press, Cambridge, Massachusetts.

Gazdar, G., E. Klein, G. Pullum, and I. Sag（1985）

Generalized Phrase Structure Grammar, Basil Blackwell, Oxford.

Greenberg, S. and R. Quirk (1990) *A Student's Grammar of the English Language*, Longman, London.

Haegeman, L. (1991) *Introduction to Government and Binding Theory,* Blackwell, Chicago.

Halliday, M.A.K. (1985) *An Introduction to Functional Grammar,* Edward Arnold, London.

長谷川信子(1989)「原理とパラメータのアプローチにおける受動構文」『認知科学の発展 2—特集 認知革命』日本認知学会編, 89-108.

東 信行 (1990)「両面性について」『文法と意味の間——国広哲弥教授還暦退官記念文集』くろしお出版, 東京, 219-238.

Hopper, P., and S. Thompson (1980) "Transitivity in Grammar and Discourse," *Language* 56, 251-299.

Hornstein, N. and A. Weinberg (1981) "Case Theory and Preposition Stranding," *Linguistic Inquiry* 12, 55-91.

池上嘉彦(1991)『英文法を考える』ちくま書房, 東京.

Jackendoff, R. (1972) *Semantic Interpretation in Generative Grammar*, MIT Press, Cambridge, Massachusetts.

Jackendoff, R. (1977) *$\bar{X}$ Syntax : A Study of Phrase Structure*, MIT Press, Cambridge, Massachusetts.

Jackendoff, R. (1987) "The Status of Thematic Relations in Linguistic Theory," *Linguistic Inquiry* 18, 369-411.

Jaeggli, O. (1986) "Passive," *Linguistic Inquiry* 17, 587-622.

Kayne, R. (1984) *Connectedness and Binary Branching*, Foris, Dordrecht.

Keyser, J. and T. Roeper (1984) "On the Middle and Ergative Constructions in English," *Linguistic Inquiry* 15, 381-416.

Koster, J. (1987) *Domains and Dynasty : The Radical Autonomy of Syntax,* Foris, Dordrecht.

Lagnacker, R.W. (1986) *Foundations of Cognitive Grammar, Volume I : Theoretical Prerequisites.* Stanford University Press, Stanford, California.

Lagnacker, R.W. (1991) *Foundations of Cognitive Grammar, Volume II : Descriptive Application,* Stanford University Press, Stanford, California.

Larson, R. (1985) "Bare NP Adverbs," *Linguistic Inquiry* 16, 595-621.

Lees, R. (1960) *The Grammar of English Nominalization,* Mouton, The Hague.

Marantz, A. (1984) *On the Nature of Grammatical Relations*, MIT Press, Cambridge, Massachusetts.

中村 捷(1991)「受動態の普遍的特徴」『日本語学』第10巻第1号, 明治書院, 54-64.

Nakamura, M. (1991) "On 'Null Operator' Constructions," in H. Nakajima (ed.) *Current English Linguistics in Japan,* Mouton de Gruyter, Berlin.

Postal, P.M. (1986) *Studies of Passive Clauses*, State University of New York Press, Albany, New York.

Postal, P.M. (1991) "Some Unexpected English Restrictions," in K. Dziwirek, P. Farrell, and E. Mejías-Bikandi (eds.) *Grammatical Relations : A Cross-Theoretical Perspective*, Stanford Linguistics Association, 65-385.

Quirk, R., S. Greenberg, J. Leech, and J. Svartvik (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*, Longman, London.

Rice, S. (1987) "Towards a Transitive Prototype: Evidence from Some Atypical English Passive," *BLS* 13, 422-434.

Ross, J.R. (1967) *Constraints on Variables in Syntax*, Doctoral dissertation, MIT, Cambridge, Massachusetts. Published as *Infinite Syntax !* (1986), Ablex, Norwood, New Jersey.

Siewierska, A. (1984) *The Passive : A Comparative Linguistic Analysis*, Croom Helm, London.

Shibatani, M. (1985) "Passives and Related Constructions: A Prototype Analysis," *Language* 61, 821-848.

鈴木英一(1990)『統語論』(現代の英語学シリーズ3) 開拓社, 東京.

Stein, G. (1979) *Studies in the Function of the Passive*, Gunter Narr Verlag, Tübingen.

Stowell, T. (1981) *Origins of Phrase Structure*, Doctoral dissertation, MIT, Cambridge, Massachusetts.

Takami, K. (1991) "A Functional Approach to

Preposition Stranding in English," in H. Nakajima (ed.) *Current English Linguistics in Japan*, Mouton de Gruyter, Berlin.

Wasow, T. (1977) "Transformations and the Lexicon," in P.W. Culicover, T. Wasow, and A. Akmajian (eds.), *Formal Syntax*, MIT Press, Cambridge, Massachusetts.

安井　稔（1989）「英語の受動文について」『英文法を洗う』研究社出版，東京，104-142.